

次の文章は、野上弥生子の小説『森』の一節である。画学生の篠原健は日本女学院の岡野校長の好意で学院内の森の小屋を借りて住んでいたが、アメリカへ留学することを決意する。校長に自分の意志を報告した健は、留学の許可と金銭の援助を実家の兄に申し出るため、故郷へ向かった。これを読んで、後の設問に答えよ。

「こもろ、こもろ」
ブラットホームにうつろな呼び声がひびいたので、誰も乗らず、降りもしなかった。ふたたび発車の汽笛。それは確水で這いあがった高地帯に、そこから別れる合図でもあり、下りで加わった速度は、川への接近をいよいよ早めることだ。

座席の位置もよかった。健は入口の板壁をうしろにした隅に、窓を左にしかけていた。川はすぐ外側を汽車といっしょに走っているはずである。しかし窓はことごとく閉まっている。それに隣の二重廻しの男も、あちこち席は別れても同じく善光寺さまの講中で、毎年の初詣でが目あてのおばあさん二人も、向側で毛糸の襟まきをあたから巻きつけて眠っていた。健は用心ぶかく立ちあがった。窓に両手をかけた。約半分、車台の底に押しこまれた横棧の板は、失った平面を縦も横もそのまま別な敷いに嵌めかえた。車内の温気で曇った窓は、そっくり磨りガラスである。健は平手でこすり直し、顔をさしよせた。その瞬間、外界が薔薇いろに染まった。なんというもないほど匂やかにみずみずしい薄紅の空間は、降りつもった新雪で柔らかいふくらみを帯び、それのみは青く高く澄みきった大空をかつきり区切って、川原、耕地、森、はるか遠い八ヶ岳、蓼科の山並みあまさず、ふり撒かれた薔薇の花びらでふんわり蔽われたかのように、そのあいだに千曲川がぼうつと燦し銀を漂わせている。

「うわっ」
健は喚きたかった。腕白小僧みたいに。が、あたりを憚る意識のひらめきよ素早く、とっさに、朝があかつきに入れたかわった。薔薇は失せた。ただ見るすべてが日光の横溢に浸された。

ばたん、ばたん、もう、どの窓もあけ放たれ、長野の乗りかえ、そのまえの下車の支度で座席も通路もごたごたした。そのあいだで健はそと側へむけた視

たものであった。

しかしこのころは読んでもたいいてい新約で、創世記までのぞく場合はめづらしい。それなのに画学生となつての彼が風景のほんのなんでもないような断片にふと愕然となり、世界というものがいかに見事な調和、秩序のもとにできているかを思うにつけ、創世記のはじめの一日からの神の営みが活き活きとここに甦った。まことに、あのようにしてつくられた世界を、そっくりそのままの美しさで捉え得るのは、詩人でもなければ、音楽家でもなく、ただ画家のみだといえないだろうか。こんな考え方はこれまでも時おりしたものであった。

いまやこの時、この情感がなにかはじめて湧きあがったかのような横溢で健を押しつつんだ。斜向うの、職人風のはんてんの男が気早い降り支度で、大きな信玄袋の紐をしめ直しているのにぼんやり眼をやりながら、まことはまだあ薔薇いろを追っていた。ブラッシュ（絵筆）の魔力はそれをも天空の一瞬にはとどめず、永遠に美しいものとして地上にもたらすことができるはずだ。健はあらたにそれを見た。もとより天才的な画家だけに許されることには違いない。とはいえ、かりにも画を学ぼうとするかぎり、誰だって目標はそこにおかなければならない。勉強だ、勉強だ、勉強だ。性急な苛らだちに突き刺された。この一年間、決して怠けはしなかったが、必死であったか、どうか。今朝、岡野校長のまえでわれともなく口にした告白がここに浮かぶ。打ち明けた通りだ。あの森の小屋をとりまく空気は、死物狂いになるにはあまりに暖かすぎ、愉しすぎ、またそれに甘えすぎたのだ。

しかし、アメリカに行つてしまえば、すべてが遠いものになるだろう。いつさいの快いものとの隔絶。太平洋の向側で待つのは窮乏と孤独のほかではない。異境の第一歩は、パンの一切れを探ることからはじまるわけだ。いやも応もない死物狂いの生活。そのあいだでこそ画も死物狂いの仕事になるだろう。あたらしい出発だ。やるとも。健は決然とおもひ、またおもう。アメリカはむしろ踏台だ。フランスでも、イタリアでも、死物狂いの覚悟さえあればきつといつかは行けるのだし、五年、十年、二十年、一生涯それ一つを握りしめて生きるなら、疑いなくブラッシュの魔力は自分のもの、自分だけのもの、ほかの誰ともちがったものとなつて獲得されるだろう。そうだ、その時こそ今朝の薔薇いろだつてそっくり捉えて見せる。——と、あの淡紅がばあつとからだ一杯に輝

線を変えようとしなかった。いまは明るい窓が左右に並んでいる。縦も横も同じ寸法に枠づけられた長方形のガラス板は、映つては去る外界をそっくり一枚一枚の風景画にした。健はそれに見入っていたのか。そうであり、そうでもなかった。あかつきと朝の別れめの、ほんの数秒とは保たれなかったあの薔薇いろに健はまだ魅せられていた。もとより両側に展開する雪の朝の水域は、岸辺に凍つてついた低い叢林が、まばゆい光線であうつと紫つぽく煙っているのさへ、愉しみにした通りの風情であつた。みんな美しい。そう思うころの底に、あの瞬間の高貴に、麗しく、匂やかな薔薇いろが浮きあがり、眼にするすべては、ただそこに在るといふだけの雑多な画面になつてしまふ。

健は雪景色には馴れきつて育つた。家に厚い草屋根がかぶさっているように正面には常念、反対側には北アルプスにふちどられた故郷の冬の盆地は、雪が朝をもつて来るし、夜も雪に吸いこまれる。病氣ばかりしていた少年期の情感になにも増して浸みついているのは、朝日、夕陽に照りあはる雪の山々、雪の野辺の美しさであつたといえる。それなのに、今朝の夜明けのあの一瞬の淡紅いろの宇宙は、かつて眼にしたことも、むしろ、思い浮かべたことさえない神秘なものであつた。

「元始に神天地をつくりたまへり」とつぜんこの言葉が意識にわきでた。ほとんど清教徒ふうに厳しい村塾の思想環境によつて、はじめて神について教えられ、はじめて聖書なるものを知つた時、健が暗記するほどに読んだのは創世記の神の、一日一日の聖なる営みであつた。空っぽのくろぐろと暗い闇の淵にすぎなかつた地が、光あれ、の一言で燦然とかがやきわたり、光と闇と、昼と夜とが分たれた最初の日から、朝あり、夕ありでつづく六日のあいだに天をつくり、地をつくり、水を集めて海とし、地には緑の草を、それぞれに種子をはぐくむ植物を、樹木を生じさせ、また大きな光、ちいさな光によつて昼と夜との支配を定め、水からはいろいろの命あるもの、鳥を、魚を、地からは家畜、昆虫、獣をその種別に応じてつくりださせた後、ついに人間を神自らの姿のまま男、女とつくりあげ、それまでの創造物にことごとく満足して、七日目にはじめて休息をとつた。——これらの記述は「聖書」と呼ばれる特別な書物であるより、正直なところ、なにか牧歌的な読みもののような興味で健をひきつけ

いた。二十二の健の夢の果てしない拡がり、つねの温和な彼には似もつかぬ猛々しさにまで変質させていた。
五分後、汽車は長野についた。健は棚の竹行李をおろして肩にかつぎ、二重廻しの男、善光寺詣りのおばあさんらとごたごたしたホームにおり、乗り換えのブリッジとして大股に歩いた。数時間後に向きあう兄の顔を、彼はもう怖れていなかった。

問一——線a-cの表現の本文中における意味内容として最も適當なものを次の各群のA-cから一つずつ選び、記号で答えよ。

a うつろな		b いやも応もない		c 温和な	
ア	ひなびて温かみのある	ア	是非もない	ア	おだやかでおとなしい
イ	こもつて聞き取りにくい	イ	有無を言わさない	イ	人当たりがよくて好かれる
ウ	空虚で生気にとぼしい	ウ	好悪の差が激しい	ウ	親切でやさしい
エ	どことなく愁いを帯びた	エ	善悪をわきまえない	エ	冷静で落ち着きのある
オ	事務的で投げやりな	オ	甲乙つけがたい	オ	ぼんやりしたところのある

その正しい説明をしている
誤訳を指摘する

問二 — 線①「矢つた平面を縦も横もそのまま別な敵に嵌めかえた」とあるが、これはどういうことか。その説明として最も適当なものを次のアから一つ選び、記号で答えよ。

- ア 窓を覆っていた鎧屏がはずされて、代わりに横棧の板がはめ込まれたということ。
- イ 窓を覆っていた鎧屏がはずされたために、窓枠いっぱい外気が流れ込んだということ。
- ウ 窓を覆っていた鎧屏がはずされて、隠れていた磨りガラスが現れたということ。
- エ 窓を覆っていた横棧の板が半分押しこまれたあとに、鎧屏がはめ込まれたということ。
- オ 窓を覆っていた鎧屏が下げられたために、くもった窓ガラスが現れたということ。

「オ」

問三 — 線②「そうであり、そうでもなかった」とあるが、これは健のどのような様子を表しているか。その説明として最も適当なものを次のアから一つ選び、記号で答えよ。

- ア 明るい窓外の景色に見とれつつも、心の中では、その映っては流れ去る景色を一枚一枚の風景画に置き換えていた。
- イ 明るい窓外の景色に見とれつつも、心の中では、闇夜から朝に変わる一瞬の間に目にした薄紅色の光景を思い浮かべていた。
- ウ 明るい窓外の景色に見とれつつも、心の中では、先刻の夜明けのあの一瞬の淡紅色の宇宙と聖書の創世記の一節を思い浮かべていた。
- エ 明るい窓外の景色に見とれつつも、心の中では、子どものころ見慣れた

「ウ」

た故郷の冬景色や病気がちだった自身のことを思い出していた。
オ 明るい窓外の景色に見とれつつも、心の中では、下車の支度でこた返す車内のあまりの俗っぽさに嫌気がさしていた。

「イ」

問四 — 線③「とつぜんこの言葉が意識にわきでた」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適当なものを次のアから一つ選び、記号で答えよ。

- ア 寒さに凍てついた厳冬の朝の風景が、ほとんど清教徒ふう厳しい村塾の思想環境や、そこで学んだ聖書のおごそかな一節を健に連想させたから。
- イ 窓外の雪景色が情感あふれる少年期のなつかしい光景を思い起こさせ、初めて神について教えられた当時の牧歌的な日々を健に思い起こさせたから。
- ウ 車窓から見た夜明けの神秘的な風景に世界の見事な調和、秩序を見いだし、それが創世記に書かれた神の一日一日の聖なる営みを健に思い起こさせたから。
- エ 最近新約聖書ばかり読んでいたのに、一枚一枚の風景画のように美しい窓外の風景が、めったに読むことのない創世記に感じていた牧歌的なイメージと健の中で結びついたから。
- オ あかつきと朝の別れ目の薔薇いろの情景が、まるで神の一日一日の創造の営みのように思われ、それが創世記の一節を健に思い浮かべさせたから。

「ウ」

問五 — 線④「彼はもう怖れていなかった」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適当なものを次のアから一つ選び、記号で答えよ。

- ア 夜明けから早朝にかけてのすばらしい景色を見たことで、落ち込んでいた気持ちを奮い立たせることができたから。
- イ 画家になりたいという希望が、瞬間の美を永遠の美として描き残すという新たな目的を持つことで、必死の覚悟へと強まったから。
- ウ 明け方の一瞬の神秘的な景色をとらえ得たことで、自分が天才的な画家として大成することを確信することができたから。
- エ 今まで中途半端であつたキリスト教の神に対する信仰が、汽車の中で体験によって、よりゆるぎないものになったから。
- オ 自然の見事な調和や秩序を描けるのは画家しかいないことにより、思い至り、自分が世俗を超越した存在に思えてきたから。

「イ」

問六 — 本文の内容や表現の特徴についての説明として適当なものを次のアから二つ選び、記号で答えよ。

- ア 困難をいとわず画家の道を突き進もうと情熱を燃やす健に対する、作者のあたたかい眼差しが感じられる。
- イ 作者は健の内面には踏み込まず、車内の様子や窓外の景色の描写を通して彼の心理を読み取らせようとしている。
- ウ 夜明けに見えた一瞬の淡紅いろの神秘的な情景が、健に宗教画家として生きる決意と勇気を与えている。
- エ 明け方から早朝にいたる窓外の景色を、直喩や隠喩などの技巧を用いて色彩感豊かに描写している。
- オ 刻々と変化する窓外の景色や車内のあわただしい様子が、兄との交渉

に臨む健の不安な心情を浮き彫りにしている。
カ 兄との交渉に臨む健の心情の推移に沿って話が展開しており、車内の様子や窓外の景色は単なる背景として描かれている。

「ア」「エ」